

村落社会における宮座の持続と変容－頭屋制度を焦点にして－

同志社大学大学院 星眞理子

1. 研究の目的と方法

研究の目的 全体社会の変動に伴い村落社会の構造も変化する。宮座は村落社会の秩序と密接に結びついている。村落社会の構造の変動により、宮座がどのように変容し村落社会の秩序にどのように影響を及ぼしているのか、頭屋制度に焦点をあてて考える。

研究の方法 宮座を本格的に研究した肥後和男は、1935年滋賀県下の神社を対象に祭祀組織の調査を試みた。結果株座と村座を設定しその上位概念を宮座とし、社会変化に伴い株座から村座へ移行するとした。宮座の変化(変容)の過程はさまざまあるが変化を5つに類型した。第1類型は、株座を示し二重同心円つまり氏子の二重の構造を表す。内円は特定の特権をもつ家々を示し外円はその他の氏子の枠である。これが外部社会の影響を強く受けた場合、内円が特に変化し村座となる。また外部社会の影響をそれ程強く受けない場合は、株座は維持されよう。第2類型(a) 古くからあるいは元来村座のタイプ。(b) 村座が株座化するタイプ。新たに村落内に支配層ができ、それらを中心に宮座を構成する。第3類型 株座から村座への移行過程。第4類型村座(原初的)から株座へそして更に村座への移行過程。村全体の座が特権的な座を形成する、あるいは特権的な家柄の座も元は村全体の座から発展したもので、更なる外部社会の影響を受け村座化する。第5類型 株座的なものが形態的にも内容(質的)的にも変質するタイプ。以上の5類型を枠組みとして持続と変容を明らかにするために調査を行なった。調査対象地は滋賀県中部広域市町村圏及び信楽町、野洲町。調査対象者は1978~80年(1次調査)は氏子総代を中心に。1996年(2次調査)は氏子総代(前回回答)経験者、古老。郵送によるアンケートを実施。

2. 宮座の持続と変容

得られた知見は以下である。(1) 村座(元来)のもつ問題。<村座・村座>が大部分である。形態的には村座で、質的には株座的要素をもつもののが多かった。<株座・村座>は、株座的要素の家筋を廃し頭屋数やおとな衆の定員のみ大部分が継承していた。一定の資格をもつ一定の人数を氏子中から絶えず補充しむらの安定を保持。(2) 株座は山間部に存続。(3) 頭屋制度の問題。両調査とも頭屋制は9割の地域で確認。頭屋が重要で村落社会の結合を強固にし、氏神が村の統合の象徴的機能を果す。①頭屋辞退者増加。頭屋の負担の軽減とむら人全員が頭屋勤めができるように村規約を改正する地域が増加。②頭屋・祭礼役の有資格者が減少。少子化、晚婚化、他府県へ転出や同一町内へ分家を出さない家の増加の影響。対策は独身者や女性家庭へ頭屋を廻す。③兼業化の進行と混住地域の拡大により、座外のむら人へも頭屋を廻そうという地域が認められるが、氏子入りはない。(4) 年齢階梯制の問題。①整っていないが年齢階梯制は両調査とも確認。株座にはない。②若者不足や若者の信仰心の希薄さをどの地域も悩んでいるが祭は不断。③2次では高齢化が顕著。終生おとな衆の地域では、有資格者全員が役割を担えるよう任期制を採用。こうした変化の背景には、明治維新、神社整理、第2次世界大戦後の諸政策(農地改革、民主化)、高度経済成長下の農村の都市化・産業化、低成長期、不況期等の社会的要因があり、これらは村落社会の構造に激しい変動をもたらし、宮座も強く影響を受け変化してきた。

以上の分析をもとに、宮座の持続と変容についてそのしくみを考察したい。